

研 究 交 流 報 告 書

令和 6 年 3 月 7 日

上 越 教 育 大 学 長 殿

所属・職名 芸術・体育教育学系 ・ 教授
氏 名 尾崎 祐司

	期 間	旅行区間及び滞在地	研究機関
研究交流日程	令和5年11月11日 ～ 令和5年11月19日	ドイツ ブランデンブルク州 コト布斯	ブランデンブルク工科大学
研究交流テーマ	ドイツ（ブランデンブルク州）の音楽科の教員養成について		
研究交流の概要 及び 研究交流の成果	<p>研究交流の概要</p> <p>ジモーネ・シュレーダー教授とグレゴール・フルマン教授から、音楽の教員養成に関する授業等を参観させていただいた。参観した活動はコト布斯市内の幼稚園での教育実習、小学校3年生の音楽の授業、中学校1年生の日本語の授業、高等学校3年生の音楽の授業、大学の模擬器楽レッスン（フルート）の授業であった。</p> <p>研究交流の成果</p> <p>今回は大学院の「音楽教育実践演習」の受講者4人を帯同していた。そのため、帰国後の授業内容では、日本の授業との違いについて授業を受けている児童生徒側からの見解によって議論を深められた。</p> <p>特に、学齢が上がるほど生徒の発言の姿勢や内容に大きな違いを感じてきた。Society5.0を掲げる日本としては、大きな課題なのではないか、という研究課題を導いた点が今回の成果である。</p> <p>交流協定の延長交渉については、残念ながら現状の「覚書」の3年継続にとどまった。その理由として、本学の学生に対する経済支援（渡航費等）が乏しいことを指摘された。</p>		
研究交流の成果の還元に関する具体的な方策（今後の計画）	上記の成果でも掲げたとおりであるが、最も印象に残った点は、高等学校の音楽の授業である。教材曲の選択や授業展開が系統立てられており、音楽を教養と捉えている学生の認識に日本との大きな差を実感した。このような認識の違いを自身の授業を通じて発信する計画である。		
研究交流中の感想又は希望等	<p>ジモーネ・シュレーダー教授は交流事業に大変熱意のある方で、私だけではなく本学の学生に対して業務の合間を縫って訪問先を案内して下さった。この大学との交流協定は今後も継続できるよう努める必要がある。</p> <p>「海外教育研究」の授業以外であっても、学生に助成金を支給できる制度を確立して頂きたい。</p>		

（注）記入スペースが狭い場合は、縦に広げて作成してください。